

シニア世代の生涯学習に関する研究

～多様なシニア世代新たなロールモデル～

社会システム研究科地域コミュニティ専攻

2009M30008 與田 秀機

【論文要旨】

本論文では、シニア世代の生涯学習に関する研究を課題とし、本研究の目的は、定年後に向けて学習活動を続けていくためには、定年前から準備が必要であることを、事例を通して明らかにすることである。シニア世代の生涯学習は、既に壮年期に始まっていて、壮年期に生涯学習の語学等を含む教養的関心が、事前に準備ある人、あるいはあった人でないと、リタイア後に海外だとかで学習しようとする人は出てこない、と考えられる。

ここではシニア世代の滞在型生涯学習と居住地型生涯学習の2つの生涯学習の全く異なるタイプを取り上げ、動機、意識さらにニーズに基づいて、そこで得られるものが何なのかを把握し、シニア世代の多様なニーズに答えられる生涯学習のあり方を検討することとした。生涯学習の形態の一つである滞在型は、基本的に日本では短期はみられるものの中長期は存在しないので中国で留学の形態をとるシニアを対象とした。欧米で定着している滞在型については、アメリカおよびイギリスを取り上げたが、日本ではエルダーホステル協会が解散するように日本では根付いてない状況にある。一方、日本型といわれる居住型は、日常生活の拠点である居住地において自己に適した方法を利用し学習を行うが、実態としては地域での活動を避け、施設に集まったり、企業を起こそうとする等、北九州市の事例を取り上げながら、行政がやっている日本型の典型といえる、はつらつ事業を取り上げて研究を展開することとし、この2者をロールモデルとして選定した。

本論文の構成は、第一章で、自立した健康で元気なシニア世代の出現は、従来の高齢者像を一変させ、国や地方自治体においても、その対応が急がれる背景がみえ、学びたい人が学び続けられる環境づくりも重要な課題として提起でき、第二章では、高齢化が急速に進むなか、シニア自身が高齢期を豊かに充実した日常ライフとして過ごしていくのかは重要な課題であることと、シニアの海外留学の形態をとる研究および日本における学びの場を提供している老人大学についても、シニア自身が担う学びの場における提供する側からのシニアを対象とした研究もされていないことも判明した。これがロールモデルとして選定した所以である。第三章では、日本の周回遅れのペースで高齢化が問題になっていると指摘されている中国におけるシニア世代の生涯学習政策について、社会参加・貢献の面からの充実が必要であり、自発的な活動に変容することが望まれると警鐘を促している現状が見えてきた。第四章では、中国における日本人シニア世代の生涯学習施設の利用事例として、第六章での聞き取り調査の対象となる人たちが学ぶ中国の学習施設の利用状況を調査した結果、留学生は一般的に男性が多いがここは女性が多いことや多くのシニア受け入れ

の実態が明らかになった。第五章は、第三章で取上げた天津市および上海市と同レベルにある日本の行政組織である北九州市を取り上げたが、シニア世代を対象とした生涯学習施設や学びの機会は、数多く提供されているが主催側が意図する受講後の地域社会への還元へと結びつかないことを問題視されている現状が浮かび上がってきた。第六章でシニア世代の生涯学習実践者の事例分析として28名による対面聞き取り調査を行ったが、学習の動機および意識については、ほとんどの人が目的に合致した学びの場としての学習グループを選択しており独学についての評価は低い。9割強が生きがいがあると答えているが、満足度は6割強となっており、生きがいと満足度は必ずしも一致しないことが明らかになった。

本論文では、研究の目的としていた定年後に向けて学習活動を続けていくためには、定年前から準備が必要であることが事例を通して明らかとなった。すなわち、退職に関して、あらかじめ準備したことについては、退職前に退職を意識して、退職後のために役立つことをした人は3分の2に達し、その半数は語学をはじめとする教養や趣味の講座等に参加し、何らかの行動を起こしているのである。定年退職は、本人の意志とは無関係に、規則あるいは法により、決められた年齢に達した時期に強制的に退職させられるという自他ともにあらかじめ了解されている人生の大きな転換点であるが、この研究調査で退職を意識した時期については、40歳頃に既に意識し始めた人が一番早く、実際の定年より前に意識した人が半数近くを占めていて、あとの半数は、実際に定年を直面した時期に意識している。この退職時期を意識した時期については、はつらつ事業に特定すると、定年前に意識した人はいない。中国留学生に特定すると、6割強の人が、定年前に意識しており、はつらつ事業との意識の差がはっきりとみられた。壮年期に生涯学習の語学等を含む教養的関心があった人でないと、退職後に中国留学等の海外で学習しようとする人は出てこない、と結論付けられるのではないだろうか。

一方、教育的ニーズから分析すると、精神的に伸び続け自己実現を求める超越的ニーズが多く、次いで、活動自体に楽しみ喜びを求める表現的ニーズと、生活に影響を与え社会変化に主体的にかかわる影響的ニーズが同レベルで、他者や社会への貢献する貢献的ニーズが続いている。中国留学生は、超越的ニーズと影響的ニーズに偏っているし、はつらつ事業においては、貢献的ニーズと表現的ニーズに集中している傾向を示している。また、生きがいの関連では、生きがいが「社会貢献」にある人の特徴的な傾向として、単独ニーズで見ると、貢献的ニーズを持つ人が、8割近くと圧倒的に高い。したがって、ここでは、「自己実現」は、超越的ニーズと影響的ニーズであり、「社会貢献」は、貢献的ニーズから、ということが導き出されることがわかった。また、生きがいと将来の夢を対比してみると、生きがいを「ボランティア」だとする人は、将来も社会貢献活動を続けたいと将来の夢も同じ志向をしめしているが、生きがいを、「自己実現」だとする人は、将来の夢は、「社会貢献」へ進化し、参入する可能性が大いにあり、この調査結果から判断をすることができる。